

京都の難読漢字の一つ【蹴上^{けあげ}】 ~その壱~

琵琶湖疏水の各施設集約地点は何といっても蹴上と断言してもいいでしょう。

そこで今回から何度かに渡ってこの地に点在する各施設等について紹介したいと思います。これまで何度となく訪れていたにも関わらずこの機会にと思って一つ一つをじっくり見ていくと新しい発見ばかりで驚いています。明治維新前後からのここ百六十年余りの今、改めて当時を知ることによっていかに京都が京都らしく残ってきてこれからもそうした伝統を守りつつ新しいものを取り込んで残っていこうとする都市で有り続けることが出来るのか見つめ続けたいと思っています。

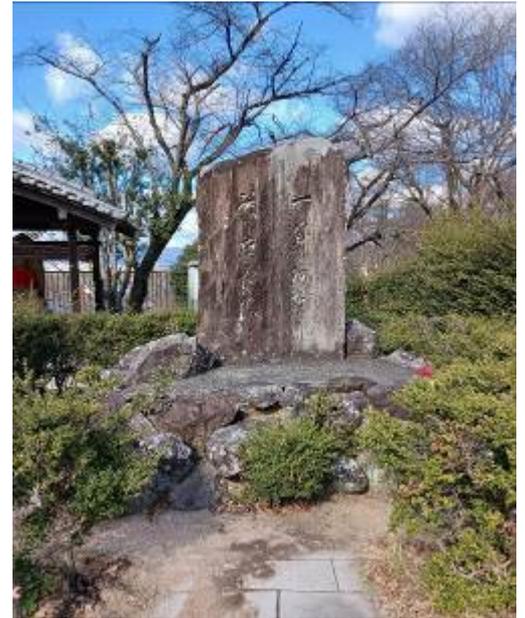
第1回目はまずはその地名となっている【蹴上】の名前から始めたいと思います。

南禅寺船溜そばにある琵琶湖疏水記念館地下1階には周辺の場所を選択すると照明が点灯し、音声でアナウンスが聞ける大型ジオラマが置かれています。現在地とあるのが疏水記念館のある場所です。



琵琶湖疏水記念館内の周辺ジオラマ

上図の中に黄色く網掛けされた場所＝蹴上義経地蔵に【蹴上】の名前の由来となったことを示す駒札があります。



左：蹴上義経地蔵 右：そのすぐ傍に建つ疏水工事殉職者弔魂碑（明治35年・田邊朔朗建立）

駒札には以下の記述が書かれています。

[平安時代末期、義経（遮那王、牛若丸）は鞍馬山を離れ、平家打倒を胸に秘め金売吉次とともに奥州へ向かう途中、日ノ岡峠に差し掛かりました。

行く手から馬に乗った平家の関原与一ら九人の一団とすれ違った時、一団の一人が誤って泥水を蹴り上げ義経の衣服を汚してしまいました。謝ることなく通り過ぎた一団の無礼に怒った義経は、九人を切り殺したと伝えられます（異本義経記より）。

斬り殺された九人の菩提を弔うために村人が九体石仏を安置しました。また異説では、九人を切り殺した後、我にかえった義経が自分の行為を悔やみ、村人に菩提を弔うよう頼んで旅を続けたとも伝えられます。

九体の内、一体がここに祀られています。

この地はもと九体町と呼ばれていて、花入れには義経大日如来と刻まれています。

蹴上の地名は、この馬の蹴り上げが、力を入れて蹴り上げる「蹴り上げ」が由来と伝えられています。 京都市]

尚、この蹴上の少し大津よりの日ノ岡峠に差し掛かる所に【御陵血洗町】という名前の付いた町名があります。御陵も難題の漢字ですが、^{みささぎ}血洗町^{ちあらいちよう}という何とも不気味な名前が付いた町名が今もそのまま残されているというのが京都らしいとも言えますね！

しかもその地区にある京都薬科大学の敷地内には義経が座ったという「義経腰掛石」があり、更に傍には「血洗池」も保存されて残っているのです。

この地元詳しい方は「血洗町」の名前の由来も四つほどあって、義経地蔵の駒札に書いたあつ

た義経が切り殺した時の刀を洗った場所もその説の一つだと言われているようですが、真偽の程は判らないようです。

さて、この御陵血洗町や蹴上を貫いているのは旧東海道であり、この日ノ岡峠は逢坂峠と共に大津から終点の京都・三条大橋に入る難所だったのです。

琵琶湖疏水による疏水船を使っでの物資の輸送が疏水事業の大きな目標でもあった訳で、疏水が出来まではこの峠を牛車に荷を載せて運んでいたようですが、雨でも降ればぬかるんで牛ですら登るのに苦労し、車石と言われた牛車の荷台の幅の車道を敷いていたと書かれています。



明治13年7月に日本人だけの手で初めて鉄道用トンネルとして開通した（旧）逢坂山トンネルは全長664、7mでした。

現在名古屋、東京方面から来る新幹線に乗ると京都に到着する直前に2つのトンネルに入った後に着くのはほとんどの人は経験されておられると思います。

現在の東海道本線のトンネルは明治13年の掘られたトンネルではなく、大正8年9月に開通した新逢坂山トンネルで、全長は2326mあります。

このトンネルが開通するまでは、東海道本線は旧逢坂山トンネルを通過後、大きく南に向きを換えて稲荷山近くでようやく京都方面に向かって京都駅に到着するのです。

更に大正10年5月に竣工した東山トンネル（全長1953m）が出来たことで現在の東海道線となったという次第です。

旧逢坂山トンネルは大津市逢坂～京都市山科区四ノ宮までであり、これは琵琶湖疏水の第一疏水のルートに近くにあたります。

琵琶湖疏水では大津市三井寺近くから第一トンネルが四ノ宮手前まで掘られ、全長が2436mです。

明治18年から5年後の明治23年に竣工しており、これもすべて日本人だけの手で完成させた訳ですから快挙というべきものです。そして第二トンネルと第三トンネルで日ノ岡峠を通らずに蹴上まで疏水をつなげたのですから、それはそれは凄いことなんです！！

その終着地である蹴上船溜の傍にある蹴上義経地蔵の横に、第一疏水工事で殉職した17名の甲魂碑を私費で建立した工事部長だった田邊朔朗の思いをはかり知ることが出来ます。

そしてその碑から徒歩で10分弱のところにある京都市の墓地「大日山墓地」に田邊朔朗と妻の静子のお墓が京都市により作られて現在の琵琶湖疏水を見下ろしながら眠っているのです。

右：大日山墓地にある田邊朔朗と妻・静子のお墓



次回以降についてはこの疏水界隈にある下記のような施設などをこれまで以上に知りえた知識を紹介しながら進めて行きたいと思っておりますのでご期待ください。

- 蹴上浄水場
- 蹴上疏水公園
- 殉職者之碑
- 本願寺水道貯水池
- 亀山天皇分骨所
- 疏水分線
- etc
- 蹴上発電所
- ねじりまんぼ
- 蹴上放水所
- 旧御所水道ポンプ室
- 扇ダム



上：南禅寺・水路閣 下：南禅寺船溜

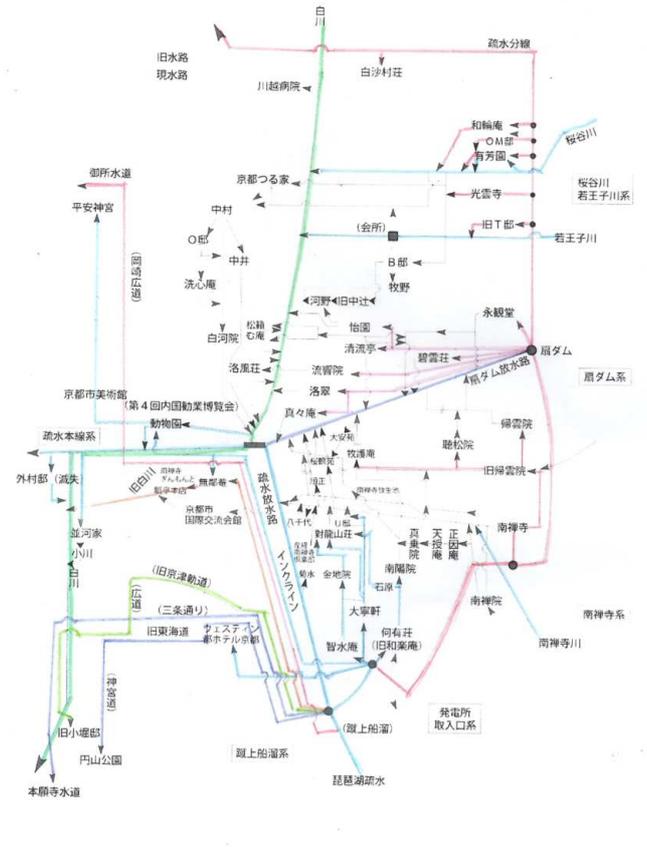


図9 水路網模式図 出典：「南禅寺界隈疏水圏池群の水系構造」 庭石と水の由来 日本庭園の石置と水系 尼崎博正に加工

疏水水路網模式図

南禅寺船溜に隣接する琵琶湖疏水記念館内の資料も次回以降、たっぷりご紹介いたします。